

ヘルスコミュニケーション学記念セミナー

東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻

がんコミュニケーション学連携講座開設記念(高山智子准教授)

石川ひろの教授就任記念

(帝京大学大学院公衆衛生学研究科ヘルスコミュニケーション学)

開会の挨拶 木内貴弘(東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野教授)

祝辞 山口育子(認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML理事長)

挨拶 若尾文彦(国立がん研究センターがん対策情報センター長)

挨拶 福田吉治(帝京大学大学院公衆衛生学研究科長・教授)

挨拶 小林廉毅(東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻長・教授)

講演 祝!がんコミュニケーション学講座設立—人間コミュニケーション学と医療の統合への期待と挑戦—

宮原哲(西南学院大学教授、元日本コミュニケーション学会会長、元日本ヘルスコミュニケーション学会代表世話人)

講演 ヘルスコミュニケーションのこれまで・これから:お二人の先生方へのエール

中山健夫(京都大学大学院医学研究科社会健康医学専攻長・教授、日本ヘルスコミュニケーション学会代表世話人)

講演 がんコミュニケーション学でめざすもの—実践から科学知へ、科学知を実践、そして生活へ

高山智子(東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻がんコミュニケーション学准教授)

講演 ヘルスコミュニケーションの根拠をつくる:患者-医師間コミュニケーション研究から

石川ひろの(帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授)

第10回日本ヘルスコミュニケーション学会 萩原明人(九州大学大学院医学系学府医療コミュニケーション学)

閉会の挨拶 木内貴弘(東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野教授)

東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野

Dep. of Health Communication, School of Public Health, the Univ. of Tokyo



開会のご挨拶

東京大学大学院医学系研究科
医療コミュニケーション学分野
木内貴弘



東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野
Dep. of Health Communication, School of Public Health, the Univ. of Tokyo



東大が変わる
国立がん研究センターが変わる
帝京大が変わる
日本の医療が変わる

ヘルスコミュニケーションの研究・教育

- ・伝えること
- ・分かること
- ・納得すること
- ・協働すること



医療を支える3本の柱

生物学、データ、コミュニケーション

BC400年代頃

魔術・体液説
(ヒポクラテス、ガレノス)

1850年代頃から

生物学(ウィルヒョウ細胞病理学、コッホ細菌学⇒分子生物学)
(病気の生物学的解明とこれに基づく診断、治療法の発見)

1980年代頃から

データに基づく医療(臨床試験・疫学研究⇒人工知能)
(診断、治療、予防法の評価)

2000年頃から

ヘルスコミュニケーション
(伝える、分かる、納得、協働)



東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野
Dep. of Health Communication, School of Public Health, the Univ. of Tokyo



ヘルスコミュニケーション学の歴史

- 1975年 国際コミュニケーション学会にヘルスコミュニケーション部門
- 1985年 米国コミュニケーション学会にヘルスコミュニケーション部門
- 1989年 学術雑誌Health Communication発刊
- 1996年 学術雑誌Journal of Health Communication発刊
- 1997年 米国公衆衛生学会にヘルスコミュニケーションWG
- 2001年 九州大学に日本で初の医療コミュニケーション学専任教員(教授、准教授)
- 2007年 東大に日本で2番目の医科大学の医療コミュニケーション学専任教員(教授、准教授)
京大に日本で3番目の医科大学の医学コミュニケーション学専任教員(准教授)
- 2018年 東大にがんを対象とするがんコミュニケーション学連携講座が設立
帝京大に日本で4番目の医科大学のヘルスコミュニケーション学専任教員(教授)



ヘルスコミュニケーション学の 主要な研究対象

対人コミュニケーション(医療機関)



ヘルスキャンペーン(社会)
マスコミュニケーション報道(社会)



インターネット(バーチャル空間)



1970

1980

1990

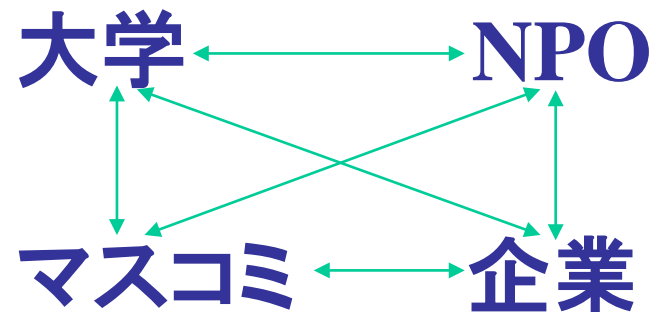
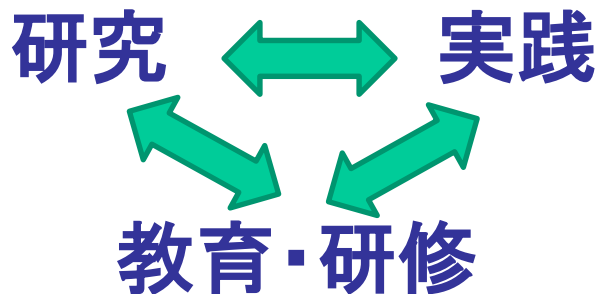
2000



独立した専門分野としての ヘルスコミュニケーション学の確立に向けて

- すべての医療系大学(医科、歯科、薬学、看護、検査等)にヘルスコミュニケーション学の専門分野・専任教員を！

- 1) 学部・大学院教育、研修
- 2) 専門的研究
- 3) ヘルスコミュニケーションに関する実践



東大公衆衛生大学院 医療コミュニケーション学講義

総論

医療コミュニケーション概論(東大:木内貴弘)
ヘルスコミュニケーションの研究(東大:奥原剛)

対人

患者・市民の教育(COML:山口育子)
グループ・組織のコミュニケーション(帝京大学:石川ひろの)
個人の行動変容を促すコミュニケーション(日本ヘルスサイエンスセンター:石川雄一)

メディア

集団の行動変容を促すコミュニケーション(キャンサーズキャン:石川善樹)
マスメディアによるコミュニケーション(1)-新聞(読売新聞:本田麻由美)
マスメディアによるコミュニケーション(2)-テレビ放送(NHK:市川衛)
インターネットによるコミュニケーション(聖路加国際大学:中山和弘)
エンターテインメント・エデュケーション(東大:加藤美生)
政策形成とアドボカシーのコミュニケーション(国際地域保健学:神馬征峰)
行動変容を促す保健医療文書の作り方(東大:奥原剛)
ヘルスコミュニケーションーがん対策への実践と応用(国立がん研究センター:高山智子)



東大公衆衛生大学院 医療コミュニケーション学演習

対人

MBTIによるコミュニケーション体験実習（日本MBTI協会：園田由紀）
各人の性格の分析し、お互いの違いを認識することから、よりよいコミュニケーションを
コーチング実習（三重大学：田口智博）
メディカルコーチング入門

メディア

行動変容を促す保健医療文書を作る（東大：奥原剛）
メディア報道のあり方を考えるメディアドクター演習（帝京大学：渡邊清高）
インターネットコミュニケーション実習（東大：木内貴弘、岡田昌史）
医療コミュニケーション学の教科書をWikiで共同執筆
ブログ執筆



注意⇒興味⇒欲求⇒行動

婦人科検診受診のススメ

〇がんは働き盛りに好発！

がんは年をとってからなるもの…と思っていませんか？
実は、**乳がんは40代から、子宮頸がんは30代から急増**します。

日本人女性の12人に1人に当たる約74,000人が乳がんになり、1年間に約14,000人が乳がんで亡くなっています。

子宮頸がんは、性交渉で感染するヒトパピローマウイルスが原因で、20代から30代で増加しています。1年間に約10,000人が子宮頸がんと診断され、約2,800人が亡くなっています。



〇がん検診を受けましょう！

乳がん・子宮頸がんは、検診の実施による死亡率の減少が明らかになっているんです。健保では今年も、女性の被保険者・被扶養者の皆さまを対象に、乳がん検診・子宮頸がん検診を実施します。自己負担なしで受診できます。

乳がんは早期発見した場合は5年生存率がほぼ100%であるのに対し、**発見が遅れた場合の5年生存率は33%**です。

子宮頸がんは早期発見した場合の5年生存率92%であるのに対し、**発見が遅れた場合は22%**まで落ち込みます。

乳がんは早期であれば乳房を温存する手術も検討可能です。

子宮頸がんも早期に発見すれば比較的治療しやすく予後もよいですが、進行すると治療が難しいがんです。

がんは早期発見・早期治療が非常に重要で、がん検診が早期発見のための唯一の方法です。

2年に1度は乳がん検診・子宮頸がん検診を受診しましょう。

健診・検診などについてのお問い合わせは
担当：やまだ、すすき まで
03-0000-0000

受診方法は裏面をごらんください

乳がん・子宮頸がん検診のご案内

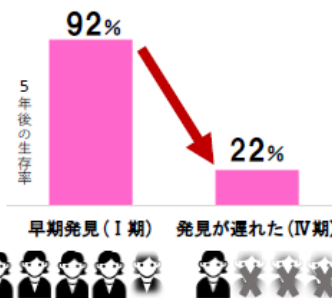
乳がん、子宮頸がんは30代から急増します！



がんは早期発見が重要。なぜなら…

発見が遅れると、
5人に1人しか
助かりません。

(子宮頸がんの場合。乳がんは3人に1人)



早期発見なら、
ほぼ全員が助かります。



異常を感じてからでは手遅れです。

早期発見できるのは、がん検診だけ。

10分の無料の検診で、安心したいと思いませんか？

有名人 (がんになった年齢)

乳がん：小林麻央さん(32) 北斗晶さん(48) 生稲晃子さん(43) 麻木久仁子さん(48) 南果歩さん(52)
子宮頸がん：坂井泉水さん(ZARD)(39) 三原じゅん子さん(44) 古村比呂さん(46) 森昌子さん(52)



演者のご紹介

祝！がんコミュニケーション学講座設立

—人間コミュニケーション学と医療の統合への期待と挑戦—

宮原哲(西南学院大学教授、元日本コミュニケーション学会会長、
元日本ヘルスコミュニケーション学会代表世話人)

➡ 日本のコミュニケーション学の大御所、ヘルスとコミュニケーションの懸け橋

ヘルスコミュニケーションのこれまで・これから:お二人の先生方へのエール

中山健夫(京都大学大学院医学研究科社会健康医学専攻長・教授、
日本ヘルスコミュニケーション学会代表世話人)

➡ 日本ヘルスコミュニケーション学会の設立・発展に尽くした盟友

がんコミュニケーション学でめざすもの

—実践から科学知へ、科学知を実践、そして生活へ

高山智子(東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻
がんコミュニケーション学准教授)

➡ 厚生労働省のがんに関するヘルスコミュニケーション政策を担う第一人者

ヘルスコミュニケーションの根拠をつくる:患者-医師間コミュニケーション研究から

石川ひろの(帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授)

➡ 対人ヘルスコミュニケーション研究の第一人者、対人から公衆衛生へ



東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻医療コミュニケーション学分野

Dep. of Health Communication, School of Public Health, the Univ. of Tokyo

